

変わる大学入試に向け、これから備えるべきことは？

「読み・書き」の堅実な積み重ねと 目的意識を持った大学選びを

これからのグローバル社会を生き抜く確かな学力とコミュニケーション能力を備えた人材育成に向けて、大学入試改革が進んでいます。新中1生が大学受験を迎える6年後、大学入試は、現在とは選抜方法や選抜基準が大きく変わっています。新しい大学入試ではどのような学力や能力が求められるのか、合格のためには中1の今からどんな準備をしておくべきか、毎年、難関大学に多数の合格者を送り出している駿台予備学校進学情報センター長の石原賢一氏にお聞きしました。

センター試験を踏襲するが、問題は難化する「評価テスト」

2020年度(2021年度入試)から大学の入試方法が大きく変わるわけですが、何が変わるのか、説明していただけますか。

石原 現在の大学入試センター試験(以下、「センター試験」と略)が廃止され、新たに「高等学校基礎学力テスト(以下、「基礎テスト」と略)」と「大学入学希望者学力評価テスト(以下、「評価テスト」と略)」という2つのテストが導入されます。

このうち、基礎テストは高等学校で身につけるべき学力の到達度を測る試験で、現在の小学校3年生が対象となる2025年度入試までは大学入試では使われないため、新中1生には直接関係ないといつてよいでしょう。

実質的に現在のセンター試験の後継となるのが評価テストです。その内容は、センター試験の延長線、改良版になると考えて差し支

えありません。なぜなら、教科書の内容が全面的に変わる現在の小3生が受験する25年度入試からは、試験の実施方法が大きく変わる可能性がありますが、新中1生が受ける21年度は、試験の形式や方法は現在のセンター試験をほぼ踏襲すると思われるからです。ただし、形式こそ大きく変わらないうが、出題レベルはセンター試験より難化し、より思考力や表現力などが問われることになるでしょう。

センター試験の過去問演習などは役に立たなくなり、白紙状態からの勉強が必要になるのです。うか。

石原 そんなことはありません。形式が大きく変わるわけではありませんが、一部の問題についてはセンター試験の過去問演習も十分有効です。ただ、それにプラスして選択式で答えが複数あるような、判断力や思考力などをみる問題への対策が必要になるということです。このような問題に加えて、記述式が出題されれば、その対策

も求められます。

多様な選抜や評価方法が増える大学個別入試

今回の大学入試改革で、文科省は大学が個別に行う入試でも、受験生の持つ能力や適性を多面的・総合的に評価する入試を行うよう求めています。これを受けて、個別入試は今後、どのように変わっていくのでしょうか。まず、国立大学からお聞かせください。

石原 文科省は、今回の大学入試改革において、①知識・技能 ②思考力・表現力・判断力 ③主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)を「学力の3要素」として示し、この3つを多面的・総合的に評価するための多様な選抜方法を実施することを求めています。

今後は、この3要素のうち①は評価テストで測り、大学ごとの個別試験では②③にウエイトを置いた選抜方法になると考えられます。特に、③を見るために、現在の大学入試は、今以上に、偏差値に頼らない大学選びが重要になると。

石原 大学の評価が大きく変わるであろうこれからは、その大学が、入学して自分の能力を伸ばし、それを武器に社会に出ていけるかどうかは自分自身で判断するしかなくなります。今回の大学入試改革では、不本意入学や適性のない学生の入学を減らすため、大学と学生とのマッチングを重視した入試を行うよう大学に求めています。そのため、大学もどのような学生像を求めるといって「アドミッシンポリシー」を明確に示し、大学が本当に求める学生を選抜するための入試を行うようになるでしょう。2016年度入試から始まった東大の「推薦入試」や京大の「特色入試」はその表れだといえます。だからこそ、受験生も自分に本当に適した大学を選ぶ眼が求められるのです。もちろん、その前提として確かな学力が必要なことは言うまでもありません。

確かな学力と大学を見る眼を養うために、駿台ではどのような指導をされていますか。

石原 授業については、従来型の座学に加えて、英語4技能を高めるための講座を設置したり、双方向型のカリキュラムなど、生徒の

AO入試などで課されているような「志望理由書」や入学後の「学習計画書」を提出させる、あるいは面接やグループディスカッション、ディベートなどを採り入れる大学は今以上に増えていくと思います。ただし、勘違いしないでいただきたいのは、③を見るといつても、①の知識・技能を外した「学力不問型」の入試を行うことではないということです。これは文科省もはっきりと謳っています。確かな知識・技能の基盤を備えたいうえで、自分は何を学び、将来どんな方向に進みたいかという明確な目的意識を持ち、さまざまな人とコミュニケーションを取りながら、社会の問題を解決していきける資質や能力を育むというのが、今回の入試改革の目的なのです。

私立大学の入試はどうなっていくのでしょうか。

石原 文科省は、国立大学は全大学が評価テストを課することを想定していますが、私立大学については、参加は任意だと言っている。

最後に、6年後の大学入試に向けて、今からどのような準備をしておけばよいか、アドバイスをお願いします。

石原 まずは、覚えたことを頭のなかで整理するだけにとどまらず、字を書く・読むという基本的な作業にしっかり取り組んでほしいと思います。教科書はもちろん、新聞やいろいろな本を読んだら、感想や自分の意見を文章にまとめてみましょう。数学の問題も解答の過程を最後まで紙に書き、計算もきちんと行う。こうした手を抜かない、堅実な勉強が6年後には大きくモノをいってきます。

そして、部活動や生徒会活動、学校行事、地域のイベントなどに積極的に参加し、さまざまな経験を積むと共に、多様な人とコミュニケーションを取ってほしいですね。特に首都圏や関西などの大都市圏では、博物館や美術館、コンサートホールなどが数多くあり、多彩な経験を積むチャンスには事欠かないはずですが、こうした経験を積むことが、文科省の言う学力の3要素、とりわけ「主体性・多様性・協働性」を伸ばすのに大きく役立つはずです。

——本日はありがとうございました。



駿台予備学校 進学情報センター
センター長 石原 賢一 氏

ます。しかし、現在も約86%の私立大学が「センター試験利用入試」を行っており、相当数の大学が評価テストを利用することになると思われます。したがって、今の大学個別試験で行う「一般入試」と「センター試験利用入試」の二本立てという構造に大きな変化はないでしょう。ただ、先ほど申し上げたように、国立大学が③の力を見るために、選抜日程が早い、いわば受験生の「青田買い」ともいえる推薦入試やAO入試の定員を増やすようになると、私立大でも何らかの対抗策を取ってくるようになるでしょう。

例えば、文科省の打ち出した英語4技能の重視を受けて、ここ数年、TOEFLやTEAP、GTICといった英語の外部資格・検定試験を利用する入試が増えています。こうした動きはますます加速していくでしょう。英語だけでなく、他教科でも民間の資格・検定を活用した入試が導入されるようになる可能性もあります。

大学の評価が大きく変わり、大学を見る眼が必要になる

入試が大きく変わる中、大学選びの基準も変わっていくのではないのでしょうか。

石原 入試制度が変わってしばらくの間は、今の偏差値を基準とした大学選びが続くと思います。ただ、そうした偏差値による大学選びは、新しい入試で入学した第一期生が大学を卒業する頃にはほぼ崩壊すると思います。社会の大学に対する評価も大きく変わり、現在、それほど社会に認知されていない大学でも、大きく伸びていく大学が現れる可能性もあると言えます。

新中1生は入試が変わったばかりの過渡期に受験することになるので難しい部分があります。ただ、それでも目先の偏差値のわずかな差に左右されず、自分と大学とのマッチングをよく考え、自分の目標を実現するためにふさわしい大学か、これから社会から評価を得